

科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成24年5月25日現在

機関番号：32517

研究種目：基盤研究（C）

研究期間：2009～2011

課題番号：21520479

研究課題名（和文）アスペクトに関与する、日本語の後置詞句の研究

研究課題名（英文）A Study on Postposition Phrases Affecting Aspectual Interpretations in Japanese

研究代表者

北原 博雄（KITAHARA HIROO）

聖徳大学・人文学部・准教授

研究者番号：00337776

研究成果の概要（和文）：動詞句が表す事象(event)の内的構造、特に事象に終了時点があるかどうかについての研究は、従来、動詞の性質に基づいて行われてきた。例えば事象の終了時点に存在する場所を表す着点句は、日本語では(1)「駅に行く」は自然であり(2)「駅に歩く」は非文だが、英語では(3)“John went to the station”、(4)“John walked to the station”のどちらも自然である。この事実は従来、「行く」とgoは同じ性質を持つが、「歩く」とwalkはそうではないと説明されてきた。しかし、本研究では、(2)と(4)の適格性の違いを、動詞の性質の違いではなく、日本語の後置詞即ち助詞の「に」と英語の前置詞のtoの性質の違いから説明する。

研究成果の概要（英文）：A number of authors have studied internal structures of events denoted by verbs in terms of the nature of verbs. I will give well-known kinds of data on goal phrases in Japanese and English; (1) eki-ni iku (the station-DAT go; 'go to school') (2) *eki-ni aruku (the station-DAT walk; 'walk to school') (3) John went to the station (4) John walked to the station. The difference in acceptability between sentences (2) and (4) has been explained in terms of the one between the nature of *aruku* and *walk*. It should, however, be accounted for in terms of the difference between the nature of postposition *ni* and preposition *to*.

交付決定額

(金額単位：円)

	直接経費	間接経費	合 計
2009年度	500,000	150,000	650,000
2010年度	300,000	90,000	390,000
2011年度	400,000	120,000	520,000
年度			
年度			
総 計	1,200,000	360,000	1,560,000

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：言語学・日本語学

キーワード：文法

1. 研究開始当初の背景

言語表現が表す事象(event)の内的構造を研究するアスペクト研究、例えば、言語表現が事象の開始、過程、終了のうちのどの局面を

表しているかといった研究は、従来、動詞の性質に基づいて説明されてきた。例えば、「着く」は、目的地に到着すると終了する事象を表す。このような動詞は限界(telic)動詞と呼ばれている。一方、「歩く」は1歩歩いて

も1万歩歩いても成立する事象を表す。このように事象の終了を語彙的に含意しない動詞は非限界(atelic)動詞と呼ばれる。これらのことは、事象の終了地点すなわち着点を表す「に」句が、「着く」とは共起する（「駅に着く」）が、「歩く」とは共起しない（「*駅に歩く」）ことから言うことができる。

しかし、「駅まで歩く」は、下線部が着点即ち事象が終了する場所を表しているようだ。下線部が着点句だとすれば限界的であるはずである。しかし、「5分(間)で」のような句と共起すれば限界的、「5分(間)」のような句と共起すれば非限界的という古典的なテストを適用すると、「駅まで歩く」は、「駅まで{5分(間)で/5分(間)}歩く」のように両方と共起するので限界的でもあり非限界的でもあることになる。これについて、報告者は1998年に『国語学』に掲載された論文で、「歩く」には、非限界動詞である活動動詞(activity)と限界動詞である達成動詞(accomplishment)という2種類の語彙概念構造(lexical conceptual structure)が設定できると説明した。このような説明は、他の言語でも採られることのある普遍性のあるものである。

しかし、近年のアスペクト研究は、動詞重視の研究から、先の例の「まで」句のような後置詞句あるいは前置詞句を重視する方向に大きくシフトした。つまり「歩く」が非限界的で「駅まで歩く」が非限界的でも限界的でもあることは「まで」句の性質によると考えるということである。本研究もそのような流れの中で、先の現象のように後置詞句の有無によってアスペクト的な意味が変更される例を、動詞の性質ではなく後置詞句の働きから捉え直すものである。

2. 研究の目的

本研究では、日本語の後置詞句の限界性(telicity)への関与のしかたを、日本語以外の言語と比較・対照しながら記述することを目的とする。具体的には以下の3点を明らかにする。

- (1) 「自宅に帰る」の下線部のような着点(goal)を表す「に」句の分析が、「皿が粉々に割れる」の下線部のような句末が「に」である結果句(resultative phrase)の性質も説明することを論証する。そしてそれに基づいて、一見着点句のようである、「駅まで走った」の「駅まで」のような「まで」句の性質を明らかにする。
- (2) 起点(source)を表す「から」句（と「を」句）のアスペクトへの関与の仕方を明らかにする。例えば「500m」のような測定

句(measure phrase)は、報告者の1997年の研究から、限界的な動詞(句)と共起しないが非限界的なそれとは共起することが明らかになっている。このようなことを前提として、起点「から」句と測定句を伴う動詞句が、「*駅から500m {出発した/着いた}」、「山頂から500m {下った/歩いた}」のように主要部(head)となる動詞によって適格性が異なることを限界性から説明する。

- (3) 動詞「入る」と共起する「に」句と英語の前置詞 *into* とのアスペクト的な性質について研究する。報告者は、1998年の『国語学』に掲載された論文で、「洞窟(の中)に5m 入る」の「5m」は「洞窟」の入り口に入った後の洞窟内での移動距離を表していると指摘した。報告者の研究では着点句は測定句と共起しないので、「入る」と共起する「に」句は着点句ではないことになる。このような「に」句の性質は、どうも英語の *into* 句にも見られるようである。これらの後置詞句と前置詞句の性質を明らかにする。

3. 研究の方法

- (1) 本研究の内容は、主に英語をはじめとする外国語で研究が進められているので、海外の先行研究で得られた知見をまずは検討する必要がある。そのため、日本語と他の言語との対照言語学的研究の色彩を帯びるものとなる。
- (2) 言語研究には、分析対象となるデータが必要である。外国語のデータについては言うまでもないが、現代日本語のデータであっても、内観による例文作成には限度があるので、先行研究が提示しているデータ、市販のコーパス・データ、新聞社や研究機関などが提供している検索データなどを利用して質のよいデータを収集し分析する。
- (3) 研究成果を世に問うことも重要である。国内外の学会や研究会で研究内容を発表したり、本研究の内容に精通している研究者と研究内容を議論したりすることによって研究を進める。

4. 研究成果

本研究では以下の3点を明らかにした。

- (1) 着点を表す、日本語の「に」句と、英語の *to* 類の句(*to*, *into*, *onto*)の違いは、前者は基本的には(存在)場所(Place)を表すのに対し、後者は(Pathの下位類で

ある) 着点を表すという点にある。このような指摘を日本語で理論的に行ったものはまだそう多くはない。

- ① 「に」句は「駅に行く」では着点句であり「駅にいる」では存在場所句である。「駅に行く」は「駅に存在するようになる」と書き換えることができる。「に」句が場所と着点のどちらの意味になるかは共起する動詞の性質による。
 - ② *to*類は、*Mary {walked/danced} to the station*のように、広く移動を表す動詞であればどんな動詞とも共起して着点句を表す。「駅に {歩く/踊る}」が不自然であるように、着点を表す「に」句は移動の終了を意味する動詞とでなければ使えない。また、*I am to the station*は非文であるように、*to*類は「に」とは違い存在場所を標示(mark)することができない。
- (2) 着点を表す「に」句と、「皿が粉々に割れる」の下線部のような句末が「に」である結果句(resultative phrase)は、主動詞の語彙概念構造‘… BECOME [y BE AT-z]’の中の‘AT-z’に相当する。‘AT-z’は「zに」と読む。
- ① 着点句と結果句のスケール構造(scalar structure)は非段階的(nongradable)である。これは、語彙概念構造の‘AT’の実現形式である「に」が非段階的だということから導かれる。
 - ② 上の語彙概念構造で、‘AT-z’が非段階的である場合は、日英語ともに限界的になる。
 - ③ ‘AT-z’が状態を表す root あるいは定項(constant)である場合(すなわち状態変化動詞あるいは起動(inchoative)動詞、形容詞由来(derivational)動詞である場合)、英語では、root のスケール構造によって動詞の限界性が決まるが、日本語では root のスケール構造の違いに関わらず、動詞は限界的である。この違いは、先の語彙概念構造で、英語は‘BE-AT’述語を重視する言語であり、日本語は‘BECOME’を重視する言語だという違いから説明される。
- (3) 「駅まで歩く」の「歩く」のような非限界動詞と「まで」句から成る動詞句は非限界的でも限界的でもあり、また継続的である。一方、「駅に着く」のような着点を表す「に」句がある動詞句は必ず限界的であり、また瞬時的な変化を表すと解釈され

ることもある。それらの事実について、「まで」句と「に」句のスケール構造から説明した。

- ① 移動を表す動詞には、「{駅まで/駅に} 行く」のように「に」句と「まで」句両方と共起するもの、「{*駅まで/駅に} 着く」のように「に」句とは共起するが「まで」句とは共起しないもの、「{駅まで/*駅に} 歩く」のように「まで」句とは共起するが「に」句とは共起しないものがある。これらの事実、後置詞句のスケール構造と、動詞のアスペクト的な性質から説明される。
- ② 「まで」句は、アスペクト的には過程を持つ動詞と共起する。これを空間的に言えば、事象の開始地点から終了地点まで地点が連続的に繋がっているということである。つまり、移動のスケール上には、無数の連続した地点があることになり、これを Beavers 流に言えば、多点スケール(multiple-point scale)を成すということになる。多点スケールは必ず段階的だと仮定する。さらに段階的なスケールは二分されるのが普通である。これらの仮定の下で、「まで」句と共起した移動動詞が非限界的でも限界的でもあることは次のように説明される。まず「まで」句が開放スケール(open scale)である場合、動詞句全体は非限界的になる。次に、「まで」句が上限のある閉鎖スケール(upper-bounded closed scale)である場合、多点スケールの終点があることになるので動詞句全体は限界的になる。
- ③ 着点を表す「に」句は、着点という一点を境界にして、それより前の局面とそれより後の局面に分けるものだと考える。このようなスケール構造を一点スケールと呼ぶ。この一点を越えれば事象が終了するため、着点句と共起した動詞句は瞬時的な事象と解釈されやすい。

今後は、2012 年度から交付された科学研究費助成事業の研究で、(2)で述べた‘AT-z’のスケール構造から指摘できるアスペクト的な性質、そしてスケール構造を考えるのに重要な道具立てである程度修飾のシステムなどを考えてゆきたい。それとともに、‘AT-z’および root の統語構造での位置についても考えたい。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計1件)

- ① 北原博雄、日本語の空間表現の意味論・統語論、フランス語学研究、査読有、44巻、2010、114-116.

〔学会発表〕(計1件)

- ① 北原博雄、日本語の空間表現の意味論・統語論―「に」句の分析―、日本フランス語学会シンポジウム招聘、2009、京大会館.

〔図書〕(計1件)

- ① 北原博雄、動詞の語彙概念構造と「に」句のスケール構造・統語構造に基づいた、着点構文と結果構文の平行性、小野尚之編『結果構文のタイポロジー』 2009、ひつじ書房、315-364.

〔産業財産権〕

○出願状況(計1件)

○取得状況(計1件)

〔その他〕

ホームページ等

6. 研究組織

(1) 研究代表者

北原博雄 (KITAHARA HIROO)
聖徳大学・人文学部・准教授
研究者番号：00337776

(2) 研究分担者 なし

(3) 連携研究者 なし